

人生を切り開く10分間の「学び直し」

生徒にとって、学校生活の大部分を占めるのが「授業」だ。
もし、授業が、分かる喜びではなく、
分からないつらさを味わう時間だとしたら、
学校は、自分の可能性を見つけ、信じる場所ではなく、
未来に対して不安や無力感を抱く場所になってしまいかねない。
つまずきの原因になっているところまでさかのぼり、
学び直す機会を学校につくることで、生徒はどう変わるのか。
長年にわたって学び直しの推進に尽力してきた教育者に話を聞いた。



江戸川大学 非常勤講師 木内和夫 きうち・かずお

千葉県立高校の校長時代に、全校体制での学び直しの推進に尽力。その後、明海大学教職課程センター教授、日本弁論連盟副会長、文部科学大臣杯全国青年弁論大会審査員長などを務める。2022年度より現職。

中学校段階の学習内容が理解できていない高校生

2022年度から年次進行の形で実施されている高校の新学習指導要領では、「学校段階等間の接続」（第1章総則第2款4）についての記述が新たに加えられた。そこでは、生徒に求められる資質・能力がバランスよく育まれるよう、必要に応じて、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目的とした学習機会を設けたり、学校設定科目等を履修させたりすることを求めている。

高校現場からも、義務教育段階での学習内容が定着しないまま高校に進学する生徒が少なくないことは、早くから指摘されていた。ベネッセ教育総合研究所の「高等学校の学習指導に関する調査2021」では、高校教師の指導上の悩みとして、「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」を挙げた教師が2番目に多かった（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」80.9%）。

義務教育段階での学習内容が定着していない状態で高校の授業を受けても、授業の内容を理解することは困難だ。そうした状況が続けば、授業への参加意欲も低下してしまう。そして、学校生活の大部分を占める授業に意欲的に参加できなければ、学校生活そのものを大切にすることができなくなり、遅刻や欠席が増えるなど、生活態度にも乱れが生じる恐れがある。結果として、退学してしまう生徒や、希望進路を実現できずに卒業に至る生徒が増えていくことになる。高校進学率が100%に迫る中、義務教育段階での学習内容が定着していない生徒の存在は、看過することができない問題になっていると言える。

学び直しの必要性を学校全体で理解する

義務教育段階での学習内容を、すべての高校生に定着させるべき「生きる力」の根幹に位置づけ、高校在学中の「学び直し」を推進してきたのが千葉県だ。千葉県では、13年から毎年、公立高校の教師有志が集まり、自校の学び直しの取り組みをより充実させるために、各校の取り組み内容やその成果、課題などを共有する情報交換会を行ってきた。数校の集まりで始まった情報交換会だが、現在は、40校ほどの公立高校が参加する学び直しの研究協議会へと発展。年2回程度、学び直しの実践を各校が報告し、よりよい指導を研究する場となっている。

千葉県立高校の校長時代に自校での学び直しを推進し、現在は江戸川大学の非常勤講師として大学生の指導にあたる木内和夫先生は、過去の情報交換会での議論を振り返り、高校における学び直しの重要性と課題を次のように説明する。

「多くの高校が、義務教育段階での学習内容が十分に定着していない生徒を受け入れており、学び直しの普及・充実は、現場の教師にとって切実な課題となっています。しかし、学び直しの必要性を感じながらも、『学び直しに時間を割くと、授業の進度が遅れてしまう』『放課後は部活動があるなど、生徒も忙しくて学び直しの時間が取れない』といった理由から、現場の教師が学び直しの導入を躊躇してしまうのも事実です」

生徒に基礎学力が十分に身につけていないことを把握していながら、「中学校までの学習内容が理解できていないのは生徒個人の問題」「高校が、学校の教育活動として学び直しを行う必要はない」と公言する教師もいたと、木内先生は振り返る。

「生徒が、中学校までの学習内容でつまづいているところまでさかのぼり、そこから学び直す機会をつくらず、『中学校で学んだことがなぜ分からないのか!』と叱っても、問題は解決しません。学び直しを学校全体で進めるためには、校長を始めとするリーダーの学び直しに対する理解が不可欠だと考え、学校を超えた情報交換会をスタートさせました」

木内先生は、当時校長を務めた高校で、一人ひとりの生徒の学習状況に合った形で学び直しを進めるため、国語・英語の授業の冒頭 10分間を学び直し専用のプリント教材「マナトレ」(*1)に取り組む時間にあてた。そして、生徒に学び直しの成果を実感させ、学びに対する自信をつけさせるため、定期考査ではマナトレから数問を出題する方針を示した。さらに、数学についても、家庭学習の課題としてマナトレに取り組ませた。その結果、ベネッセの「実力診断テスト」(*2)のGTZ(*3)がDゾーンの生徒は、1年間で3分の1に減少。



*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント教材。

*2 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、教科書レベルを中心に基礎学力を測る記述式テスト。

*3 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

生徒の進路意識が高まり、大学入試センター試験（当時）の受験者数は、3年間で5倍になった。

「学び直しの教材に積極的に取り組む生徒の様子や学力向上を示すデータ、そして生徒の学び直しを支援する現場の先生方の努力を、校長ブログで発信しました。そのようにして、学び直しの成果ややりがいを校内で共有するうちに、先生方の学び直しに対する抵抗感もなくなり、学校としてあたり前の教育活動になっていったのです」（木内先生）

10 分間の学び直しが、人生を変える

木内先生が校長として勤務した高校では、学び直しの推進と並行して、学び直しによって定着した基礎学力を生徒が発揮し、活躍できる機会をつくった。

「例えば、生徒が学び直しによって定着した国語の基礎学力を発揮できるよう、短歌の制作などの表現活動を充実させました。学び直しを中学校までの学習内容の復習にとどめるのか、高校生ならではの学習活動につなげていくのかは、教師の意識と工夫次第だと思います。学び直しを通して自分が成長したことに生徒が気づく様々なチャンスをつくることは、学校の魅力化にもつながるでしょう」（木内先生）

木内先生は、高校に勤務していた時に会った生徒の様子を思い出しながら、「生徒たちは学び直しが大好きだった」と語る。

「どの生徒も、もっと学びたいし、もっと分かるようになりたいと思っています。分からないままでよいと本当に思っている生徒はいません。学び直しを通して学びに対する自信を取り戻すことで、生徒の人生は大きく変わります。実は先日、私と一緒に学び直しに取り組んだ教え子から、千葉県の教員採用試験に合格したと、報告がありました。その生徒の高校時代の学力は決して高くありませんでしたが、授業前の学び直しによって少しずつ自信をつけ、地元の私立大学に進学しました。大学では常にトップの成績を取め、国立大学の大学院に進学しました。彼は電話で私に、『10分間取り組んだプリントのおかげで、自分は変われました』と話してくれました。高校時点の学びの遅れを、10分間で取り組むプリントをきっかけに、その後の人生で取り戻し、花開いていったのです」

学び直しは、基礎学力の向上だけでなく、人間的な成長にも大きく寄与すると、木内先生は力説する。

「私が籍を置く江戸川大学は、学習サポートボランティアとして、大学生を高校の学び直しの授業に派遣するなど、地域社会との連携にも力を入れています。また、これからの時代は、高校生だけでなく、大学生、そして社会人にも学び直しが一層必要になります。すべての人が人生を切り開くチャンスとして、いつでも学び直しに取り組める社会になることを願っています」

